06年カツオ

単位：数量，1000トン、価格，円／kg

年	漁獲	産地 生	産地 冷	輸入	輸出 生冷	輸出 缶	消費地 生	消費支出 生(グラム)	消費支出 鰹節(g)	在庫	加工品 缶	加工品 削	加工品 節	加工品 生利
17	370	95.2	246.8	52.1	80.5	0.1	33.2	1,441	351	36.6		20.7	40.1	3.8
18	323	79.0	220.4	50.5	52.6	0.1	27.8	1,365	350	33.0				
%	87	83	89	97	65	98	84	95	100	90	###	0	0	0

年	産地 生	産地 冷	消費地 生	輸入	輸出 生冷	消費支出 生(円)	消費支出 鰹節
17	190	106	405	89	94	2,086	965
18	234	131	476	92	94	2,106	930
%	123	124	118	103	100	101	96

漁業・資源・漁獲

日本のカツオ漁業は、千葉以南の沿岸や伊豆諸島周辺で行われている曳縄を別にすると大別し一本釣りとまき網に分けることができる。また、カツオの漁獲量の大半がこの２つの漁種により占められている。

昭和39（1964）年南方竿釣り漁業が周年操業化、同45（1970）年の開発センターの調査を境にして同49(1974)年に海巻き操業の本格化がみられ、漁場は南及び東方にも拡大し、10°Ｓ以北、155°W以西の中央～西部太平洋で広範囲に形成されている。更にインド洋(現在は撤退している船も多い)、タスマニア、ニュージー海域での操業もみられるようになり、その比較的豊富な資源量と品質的安定も加わり、特に海巻物は節業界にとっては輸入物と同様、貴重な加工原料となっている。

1970年代以降増加を続けていた中西部太平洋の漁獲量は、近年では約120万トン前後で、そのうちまき網漁業が中心で7割以上、竿釣り漁業が約2割（その約半分が日本船）、その他の漁業が1割弱を漁獲する。日本周辺の中心的漁場の常磐・三陸沖漁場（漁獲量10万トン前後）でも1980年代後半からまき網操業が増加し、年により漁獲量の半分近くを占めている。

本資源は1980年代中期から高い水準が続いている。資源量の変動は加入量による部分が大きい。最近の資源量は長期的な平均値より高い水準にあると考えられている。漁業の資源利用の割合は増加傾向が見られ、最近年で14%となっている。現在の漁獲圧はMSYレベルより下で、過剰漁獲ではなく、資源量もMSYレベルより上で、乱獲状態ではないと考えられている。

なお、2003年のWCPFC準備会合では、メバチ・キハダ小型魚混獲減少のために過剰な漁獲能力の削減の決議が採択され、カツオ漁獲量の動向に影響すると考えられる。

インド洋の資源は、最近のまき網漁獲物サイズは、モザンビーク海峡でやや小型化したが、全体では大きな変化はない。まき網のCPUEは、モザンビーク海峡を除き増加傾向にある。また、モルディブの竿釣りのCPUEも、近年増加傾向にある。これら漁獲物サイズ・CPUEの経年変化と漁獲量の推移を見る限り、資源に問題があるとは判定できない、といわれている。

現在操業が行われている中西部太平洋で主に日本、台湾、米国、韓国、ＰＮ、フィリピン、インドネシア、ソロモン、中国、その他、東部太平洋ではエクアドル、メキシコ、ベネズエラ、米国、バヌアツ(便宜置籍船)、コロンビア、スペイン、パナマ(便宜置籍船)、その他、東部大西洋ではス

ペイン、フランス、ベネズエラ、インド洋ではスペイン、フランス、セーシェル等のまき網や、モルディヴの竿釣り、流し網が操業を行っている。

また、国内供給問題では、年初に大型竿釣船の10隻程度の休・廃業が実施されたが、引続き燃油の高騰が続いており、今後の経営不安要素は消えていない。

本年のカツオの漁獲量は、32.3万トンであった。

産　地　水　揚　量　と　価　格

18年の産地水揚量は、29.9万トンで前年34.2万トンをかなり上回った。

内訳は、生7.9万トン、冷22.0万トン（前年：生9.5万トン、冷24.7万トン）であった。

本年の生鮮（日本近海）の漁況は、初漁期（1～4月：犬吠埼以南の本邦南岸域漁場）の釣り漁場でのサイズはともかく、昨年を更に下回る低調さであった。

しかし、黒潮前線を越えてから本格化する三陸・常磐沖での漁は、本年はまき網が極めて好調に推移し、近年では最も多い水揚げになった。しかし、竿釣りは、昨年に比べると極めて初期と「下りガツオ」・「戻りガツオ」の時期に低調に推移したことで前年をかなり下回った。

海域別漁獲量は、三陸62%（前年：68%）、常磐29%（前年：25%）、南西・東海1%（前年：1%）、九州西部4%（前年：3%）九州南部2%（前年：3%）であった。

本年も漁場形成の主体はより三陸・常磐海域主体で、初漁期の不振を反映して九州地区でのシェアは低かった。

南方竿釣りのカツオ（東沖を含む）焼津

年次	単位		17年	18年	前年比(%)
水揚隻数	隻	延	243	173	71
水揚量	トン	計	62,642	43,145	69
々	々	カツオ	49,632	35,062	71
々	々	ｷﾊﾀﾞ他	13,010	8,083	62
１隻当たり	々	計	258	249	97
水揚金額	100	計	11,724	10,354	88
１隻当たり	万円	計	48	60	124
価格	円/kg	平均	187	240	128
々	々	カツオ	136	218	160
々	々	ｷﾊﾀﾞ他	382	334	87

海外まき網の状況（全国）

年次	単位		17年	18年	前年比(%)
水揚隻数	隻	延	321	329	102
水揚量	トン		222,105	213,409	96
１隻当たり	々		692	649	94
水揚金額	100		23,628	26,578	112
１隻当たり	万円		74	81	110
価格	円/kg		106	125	118
水揚量	トン		185,928	176,762	95
１隻当たり	々	カツオ	579	537	93
価格	円/kg		97	111	114
水揚量	トン		30,207	31,896	106
１隻当たり	々	キハダ	94	97	103
価格	円/kg		170	202	119
水揚量	トン	メバチ	5,517	4,369	79
々	々	その他	454	382	84

冷凍カツオは、竿釣り（焼津）は南方がほぼ前年(2万3千トン)並みの2万2千トン、東沖が前年（2.6万トン）を大きく下回る1.2万トンであった。一方、本年の海巻きは、キハダ（キメジ）が前年を上回り、カツオ、メバチ（ダルマ）が減少した。

竿釣りビン長は「トロビン長」として回転すし等を始めとした外食産業・居酒屋等での需要増加もあってマーケットは定着している。本年は、秋口から冬場にかけての東沖（天皇海山）での漁は不振であったが、上半期の伊豆列島周辺漁場での漁獲は好漁となった。なお本年の釣トンボの水揚げは生鮮9,772トン(前年3,847トン)、冷凍7,075トン(前年13,044トン)であった。

価格は、生234円（前年190円）、冷131円（前年106円）と何れも堅調な推移が目立った。

消　費　地　入　荷　量　と　価　格

18年の消費地入荷量（１０大都市）は、生2.8万トンで前年（生3.3万トン）を下回った。

本年は走りの時期から入荷が少なく、夏場の7,8月のみ前年を上回っただけで、その他の月は前年を下回る入荷に止まった。

近年カツオはＢ１製品の定着の中で市場外流通主体に「タタキ」や東沖「トロカツオ」等は周年商材として出回っているが、鮮魚としての出回りも年間を通じて昭和年代に比べかなり幅広くなっている。

本年は、特に近海竿釣り漁が並み漁に終わったことや冷凍魚も含めて堅調な市況展開もあり、家計調査による消費は数量、金額とも昨年を下回った。

価格は、476円で入荷量の減少を反映し、前年の405円を上回った。

輸　出　入

カツオの輸出は、原魚と缶詰に分かれるが、缶詰輸出は既に国際競争力はなく、年々少なくなっており、輸出も僅かになっている。

本年は、原魚5.3万トン（前年8.1万トン）、缶詰124トン（前年126トン）で原魚は缶詰用として国内漁が並漁の割には、円安やバンコック相場の上昇もあり、前年を下回ったものの水準としては比較的高かった。

輸入は平成年度に入ってから円高傾向もあって年々増加傾向がみられていた。これは節用需要の高まり（竿釣船のＢ1化に伴い国内の需要を満たしきれなくなった）で量、価格、品質とも安定している輸入物への依存度が高まっているためである。しかし本年は円安の定着や国際市況の上昇もあり、輸入量は5.1万トンでほぼ前年（5.2万トン）並みであった。

価格は、92円で前年(89円)を上回った。